川西町

米沢藩でいちばん大きい水路「長堀堰」

長堀堰は、白川の水を遠く離れた川西町上小松・中小松・下小松地区の水田をうるおすために作られた用水路で、その水路が長いことから「長堀」と名前がついたといわれております。

完成する前の三つの地区は、町内を流れる犬川から水を引いて田んぼを作っておりました。しかし、春の雪解けにはたくさんの水がありますが、田んぼに水を引く時期には水が少なくなり、下流にある下小松地区は、晴の日が続くと田んぼが干上がり、村人たちが他の所に移り住むということもありました。

このように水が少ない地域であったため、村人たちはたくさんの水が流れる白川から、水を引けないものかと考えておりました。そこで、下小松に住む島貫源兵衛が中心となり、上小松・中小松の3つの村で、藩主上杉定勝公にお願いし、1625年（寛永2年）ようやく許しをもらい工事ができるようになったのでした。

島貫源兵衛翁の碑（川西町下小松）

工事は、順調に進むと思われておりましたが、山のふもとまで来たとき、土がくずれやすく、お金や作業する人々も考えていたより多くかかり、思うようには工事が進みませんでした。そこで、上小松と中小松の人たちは、これでは水路が完成しないと思い、工事から手を引いてしまいました。しかし、下小松の人たちは、この水路を完成させなければ、みんな死んでしまうかもしれないとの思いから、途中でやめることはできませんでした。とくに、先頭に立って村人を引っ張ってきた、源兵衛は自分ではりつけ台を作り、もし失敗したら処刑してもらいたいとの決死の覚悟で、寝ることを忘れるほど働いたのでした。

源兵衛たちの努力により工事がようやく進み出したころ、ふたたび上小松・中小松の二つの村がくわわり、1643年（寛永20年）に白川の取り入れ口から約12kmもの長さの「長堀堰」がようやく完成したのでした。

昔の長堀堰

この工事により、米沢藩は積極的に新田開発を行い、村人たちの暮らしも豊かになってきましたが、たくさんの田んぼが作られたために水が不足し、「水争い」がたびたび起こるようになったのでした。そこで、藩は白川に水をたくさん流すため、(1)「飯豊山穴堰」を考えたのでした。

穴堰が完成した次の年の1819年（文政2年）から長堀堰の幅を広げる工事を行い、米沢藩の領内でも最大の大堰がついに完成したのでした。それからの長堀堰は、流れる水の量が倍になり、長い間水不足に苦しんでいた農民たちも、安心して農業ができるようになったのでした。

今の長堀堰

(1)「飯豊山(いいでさん)穴堰(あなぜき)」の歴史は、～やまがた水と土歴史(れきし)探訪(たんぼう)～というパンフレットに書かれております。

【参考文献　長堀堰土地改良区誌…長堀堰土地改良区】